

平成18年度 大学院工芸科学研究科博士後期課程 学位記授与式
学長告辞

本日、博士の学位を取得されました皆さん、まことにめでとうございます。京都工芸繊維大学を代表して心から祝意を表します。また、長い間にわたって皆さんの研究を支えてこられたご家族および関係者の方々に対して深い敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に大学院の組織を改組し、工芸科学研究科を設置いたしました。そして、今までに、592名の博士号取得者を輩出し、多くの知的財産を着実に蓄積してまいりました。

本日、皆さんには、それぞれ課程博士第444号から第471号まで、また、論文博士第150号から第156号までの学位を授与させていただきましたが、皆さんの研究業績は本学の知的財産とさせていただくことになります。

提出していただきました学位論文や報告書は、広く人々に公開されることになり、皆さんの後輩である学生の研究のために、また、それぞれの学問分野の新たな展開のために、さらに、技術革新や産業創生の新たな素材として利用されることになります。

皆さんは、輝かしい成果を挙げ、本日目出度く博士の学位を取得されました。明日からは、新しい環境で、それぞれの将来計画の実現に向け、勇往邁進されることと思います。その際、本学で研鑽された研究成果を十分に生かし、人生の新たな段階を切り開くよう一層奮励努力されることを祈って止みません。

皆さんの新しい旅立ちにあたって、研究生生活を進めていく上で大切なことについて一言、話させていただきます。

皆さんはセレンディピトス (serendipitous) という言葉をご存じでしょうか。セレンディピトスとは、「意図しなかった」あるいは「意外な」という意味です。

ペルシャの The Three Princes of Serendip というおとぎ話に由来しています。

セレンディプ (Serendip) はスリランカのペルシャ名で、セレンディプの三人の王子が使命をおびて旅に出て、意図しなかった、意外なことに遭遇するという物語です。

ノーベル賞をはじめ様々の画期的な理論や研究成果が紹介されるとき、セレンディピトスな発見が契機となったという話がしばしば語られます。

ある失敗や偶然の出来事が契機となって研究が急展開し、大きな成果につながったというエピソードは、科学研究の世界では枚挙にいとまがないほどです。田中耕一さんがノーベル賞を受賞されたときもまさにそうでした。

しかし、セレンディピトスな発見はたまたま訪れる幸運ではありません。独創性のある緻密な実験の積み重ね、精密な観測装置の構築、卓越した注意力、持続力、集中力を発揮し続ける忍耐がいつも前提になっています。そしてその基になっているのは確固とした概念・構想です。

しかし、確固とした概念・構想を持つことは、容易なことではありません。成果を早く挙げたい、社会的評価を得たいという欲望から、そのときどきの時流に乗った研究に向かってしまい、しばしば迷走し、真実の姿をとらえることができなく

なってしまいます。その結果、セレンディピトスな発見という幸運にめぐまれることはないのです。

ヒトはどうして時流や世論に大きく影響されるのでしょうか。時流や世論はどのようにして形成されるのでしょうか。

ドイツのノイマンは、「沈黙の螺旋理論」の中で、世論形成のダイナミズムを次のように説明しています。

一般に、人々は、社会の中で孤立することに対して恐怖を抱きます。そして常に周囲の環境を観察し、自分の考えが、社会の中で支配的なものかどうか、多数派の考えかどうかを判断します。このような中で、自分の考えが社会で支配的であると感じた人は、声高に意見を表明します。これに対して、自分の考えが支配的ではないと感じた人は、沈黙を保ちます。

支配的な、あるいは多数派であると感じた人の雄弁さが、そうでない人々の沈黙を生み、この沈黙がさらに多数派の意見の雄弁を生むという、螺旋状の自己増殖プロセスによって、一方の意見のみが公的場面で支配的になっていきます。これが世論の形成過程です。

情報の公共化をおこなうマスメディアによって伝達される情報が、多数派の意見として人々に認知されることによって、沈黙の螺旋はますます促進されるのです。

しかし、このような状況にあっても、沈黙の螺旋に飲み込まれない、ハードコア層と呼ばれる人々が存在します。これらの人々は、その考えがマスコミに取り上げられない限りは事実上沈黙させられるのですが、しばしば社会の変化を主導することがあると言われています。実は、世論というような共通意見が世間一般に存在するのかどうかということ自体が疑問で、それを知るのは相当困難なことなのです。

世論は、社会の個々人がもつ孤立への恐怖と多数派への同調という行動によって、沈黙の螺旋というダイナミクスが形成されるというのが、沈黙の螺旋理論の教えるところです。

研究者の世界においても、世論に似た形で、研究テーマや理論が認知されるようです。時流に乗った研究テーマで、その時の学会の権威の意見に沿う研究成果が広く流布する傾向があります。しかし、研究者の中にも、ハードコア層というべき人々が存在し、自然を自分の目で深く見続け、その意外性に富んだ姿を明らかにしてきたのです。

物事の真の姿を知るためには、確信のもてる概念・構想が必要です。そしてそれを堅持し、それを実証するためには、我慢し耐え、困難を克服することが重要なのです。

私は、皆さんには、沈黙の螺旋に飲み込まれない、ハードコア層と呼ばれる研究者になっていただくことを希望します。そして、創造的な仕事をしていただきたいと思います。

皆さんの活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞といたします。

本日は、博士の学位の取得、まことにおめでとうございます。

平成19年3月26日
京都工芸繊維大学長
江島義道